

情報処理工学科の設立と以来10年の歩み

(付) 情報処理工学科各研究室の歩み

美咲隆吉* 小林富士男*

Foundation of the Department of Information Processing Engineering
and the Progress during the Past Ten Years

Appendix : The history of each Laboratory of the department

Takayoshi MISAKI and Fujio KOBAYASHI

ABSTRACT

The department of information processing engineering was founded on April, 1986 in the faculty of engineering, Fukuyama University. The course was divided into 5 fields, namely : fundamentals, networks, computer systems, image processing and industrial management. These fields took charge lectures, exercises and experiments of special subjects, respectively. The teaching staffs (include supported staffs) were organized with 18 persons. The fixed number of entrance was 100 students (two years after 120 students). In addition, the master course of information processing engineering was established on April, 1991 and the doctor course on April, 1995 in the graduate school of engineering. On the other hand, looking back over the history of the past 10 years, both the education and research have gone smoothly under kind corporations of many people. However, it goes without saying that there are many difficulties laying toward the development. All staffs must have positive desire, vision and policy for the future education.

Keywords : programming, computer systems, computer network, image processing, numerical analysis

1. 学科の沿革と概要

開学10年を経て、工学部の既設3学科に続いて宮地茂総長の指示により、時代に先駆けて情報処理工学科及び生物工学科の設置が計画され、昭和61年(1986)、両学科が発足した。当時情報処理工学科は中四国の私立大学では唯一の情報関係学科として、中四国はいうまでもなく、全国的に広く注目を集めた。初年度入学定員は100名で、教育・研究は五分野構成で発足した。教員構成は当初の計画通り、学年進行とともに完全に充足された。初年度5名でスタートし、続いて2年度に5名、3年度に2名、4年度に3名が着任した。完成年度以降にも、さらに1名

が補強され、教育・研究体制がいっそう充実した。その他、3名の技術職員が配備されて、実験・演習におけるマンツーマン指導の補助に当たっている。教育・研究の五分野は、情報処理工学の全分野をカバーする情報基礎、情報伝送、情報処理、映像情報および経営・管理であり、上記スタッフの専門に応じて各分野を分担した。一方、施設面では、学科発足と前後して、学科の教育・研究計画に合致した16号館が完成し、教育・研究設備も逐次予定どおり導入されたので、新入生を迎えての教育はきわめて順調に進んだ。導入された設備の主なものを挙げると、ホストコンピュータとそれに接続した62台のパーソ

ナルコンピュータを含むコンピュータ教育システム、各専門分野の学生実験装置など学科設置基準による教育設備および研究用の各種実験装置・計測機器、専用コンピュータシステムなどである。このほか、教育・研究用の内外の図書・文献（図書館で集中管理）も十分用意された。

このように教員構成、施設、設備が充足されて、年とともに学科の教育・研究は順調に軌道に乗り、平成2（1990）年3月には、一期生を社会に送り出すことができた。完成年度には大学院設置の準備を進めたが、新しく改訂された情報処理工学の標準カリキュラムとの整合性などをもう一度検討したうえで申請することになった。平成2年、設置申請を文部省に提出した。後に、情報処理工学専攻のところで述べるように平成3年4月、大学院工学研究科情報処理工学専攻（修士課程）が開設された。

情報処理工学はコンピュータと通信技術の急速な発展による社会の情報化とともに生まれた新しい学問、技術である。従来からある特定の分野に属さないで広い範囲をカバーし、学際的性格が強い。そして、その学問としての方法論も論理的推論やシミュレーション実験といったソフトウェア的手法を基軸としている点から、従来の工学の分野と趣を異にしているといえる。こうしたコンピュータを駆使するソフトウェア的手法による技術に最近の若い人は興味を持ち、また関心も強い。情報処理工学科の志望者はとにかくコンピュータを自由に使える技術を学びたいと希望する者が多く、入学した学生は、コンピュータから離れられないほどに興味を示した。こうした学生に講義だけでなくマンツーマンで実地指導し、自由にコンピュータをできるように解放することによって、社会の要請に応えうる実践的人材の育成を一つの目標としてきた。しかし、変動の激しい情報化社会を担う情報処理技術者として、単にコンピュータに習熟しただけでは決して一人前の人材であるとはいえない。こうした観点から、カリキュラムは、情報基礎、情報伝送、情報処理、映像情報、経営・管理といった情報処理の基礎から応用にいたる広い学問、技術を体系的に修得し、かつコンピュータに習熟した本格的な情報処理技術者の育成を目標に編成された。

卒業生を送り出してから数年に過ぎないが、当初期待したように、卒業生は備南地域はもとより、全国いたるところで活躍し、評価も年を追って着実に上昇している。世の中に、景気の好・不況はあっても、社会の情報化は明らかに日々進んでおり、さきに述べたような、本格的な情報処理技術者の需要は増加している。それだけに需要に応えることができる能力のある人材を送り出すことこそが、情報処理

工学科の責務であると自覚している。

なお、入学定員100名であったが、平成4年から臨時増員により120名となった。

2. 学科の教育目標（技術と人格形成）

情報処理工学科での教育内容を示すカリキュラムは基礎教育、実験、演習を重視し、独創性と応用力のある情報処理技術者を育成することを目指して、次のように構成されている。（表1参照）

専門基礎科目を特に重視し、必修の数学、工業数学、物理学、工業英語を含む18単位以上を修得することになっている。

専門科目については、本学科の特色と標準カリキュラムの整合性を図り、当初のカリキュラムについて、いくつかの改定が行われた。特に標準カリキュラムを体系的に修得させるとともに、コンピュータが自由自在に取り扱える実践能力の育成も十分に配慮されていることはすでに述べた通りである。

専門分野は、情報基礎、情報伝送、情報処理、映像情報および経営・管理の五分野あるが、その内容は次の通りである。

情報基礎分野は、プログラミング、ソフトウェアの基礎、計算機のアルゴリズム、計算機アーキテクチャ、情報理論など、情報処理工学の基礎を担当している。

情報伝送分野は、情報伝送、情報伝送方式、コンピュータネットワーク、情報処理システムなどを担当している。

情報処理分野は、計算機構成、マイクロコンピュータ、コンピュータのハードウェアとソフトウェア、応用プログラミングなどを担当している。

映像情報分野は、画像処理、コンピュータグラフィックス、パターン認識など画像情報の処理と応用などを担当している。

経営・管理分野は管理工学、オペレーションズリサーチ、システム工学、コンピュータの経営・管理への応用などを担当している。なお、この分野については後に経済学部経営情報学科が新設されたので、互いに交流しながら工学的視野から教育を行っている。

学科としての教育目標は、社会の要請に応えうる技術者・研究者の育成にあたることは、いうまでもない。しかし、社会に出て、いかに技術に優れ、研究に秀でていても、それだけでは、一人前の社会人とはいえない。社会には、規律もあり、人と人との交りもある。教養ゼミ、講義、実験、卒研ゼミなどの学生生活を通して、常に規律を守り、温い人間味のある、そして信頼のおける学生の育成につとめなければならない。こうした両面をそなえた学生の育

成が本学科の教育の目標（技術と人格形成）である。このことは、大学院についても全く同様である。

3. 大学院工学研究科

(1) 情報処理工学専攻（修士課程）

急激な変化を続ける社会において、情報処理に関する学問・技術の高揚の要となる人材、すなわち技術開発と研究を推進する能力をもつ専門技術者・研究者の育成が急務となってきた。

このような社会的要請に応えるため、平成3年4月に情報処理工学科を基盤とした大学院情報処理工学専攻が設置され、教育・研究体制が整備充実された。本専攻の入学定員は8名で、情報基礎工学系、情報処理システム工学系、計算工学系、画像情報工学系の4学系、および通信伝送、生体情報計測の2関連科目で発足した。教育・研究も活発となり次は、博士課程の設置（平成7年発足、次項で述べる）に向かって準備する運びとなった。

平成5年3月には、修士課程第1期修了生を社会に送り出し、すでに4期生を送り出している。修了生の大部分は全国各地の大企業に就職して各職場で活発に活躍しており、その評価も年々向上している。このような実績から、学部学生の大学院進学希望者も増加している。

本専攻は、情報処理工学の基礎から応用にわたる広い学問・技術分野を、4学系を柱として編成している。各学系は学部における講義、演習及び実験をそれぞれ基礎として、より高度な内容の教育・研究を行っている。さきに挙げた柱となる4学系の内容は次の通りである。（表2参照）

情報基礎工学系

情報処理に関する基礎的方法論、計算機アーキテクチャと基本ソフトウェア及び固体デバイス技術、ノイズと信頼性技術等基本的分野を主として担当している。

情報処理システム工学系

ディジタル伝送における情報の処理、計算機システム、計算機ネットワーク、総合的情報システムなどを担当している。

計算工学系

計算機による各種計算のアルゴリズムとくに数値情報、非数値情報の処理におけるプログラミング技術、数値シミュレーションによる各種機器・装置・システムの最適設計等を行う高度な応用プログラムの開発等の分野を主として担当している。

画像情報工学系

文字、図形、画像等の視覚パターンの認識機構と認識技術の応用、画像情報の変換、処理プログラムの開発、コンピュータグラフィックス、リモートセ

ンシング並びに各種社会・産業における計算機応用の諸分野を主として担当している。

関連科目

関連科目として、カリキュラムに全学系に共通に計算機ネットワークの基礎となる通信伝送、情報処理全般の基礎となる情報計測を特に設けている。

本専攻においては、各学系がそれぞれの専門分野の教育・研究を分担するとともに、学系間の有機的結合によって総合化を志向し、高度にしてかつ幅広い情報処理に関する教育・研究を実施する体制を整えている。

(2) 電子情報工学専攻（博士課程）

電子・電気工学科は、昭和50年の4月の福山大学開学と同時に、電子・電気工学専攻（修士課程、入学定員8名）は昭和54年4月にそれぞれ設置された。電子・電気工学専攻と情報処理工学専攻は、設置されて以来、今日まで優れた人材を育成するとともに、数々の研究成果を上げて社会の要請に応えてきた。

ところで、学術はその進歩とともに、ますます細分化の傾向を示しているが、一方では、多様化しすぎた専門分野の再構築やユニークな応用の開発が強く期待されている。

こうした社会的背景のもとに、上記2専攻を基盤として、電子・電気および情報処理の各分野を結合し、高度かつ斬新な学術を推進する能力を有する技術者・研究者を育成する体制を整えるため、電子情報工学専攻（入学定員2名）が平成7年4月に設置された。

電子・電気工学および情報処理工学の各専攻は独立したものであるが、両専攻における画像処理・画像生成、数値解析・計算機シミュレーションなどのソフトウェア的手法を駆使する情報処理分野（画像情報工学系、計算電磁工学系）、種々の情報を伝送・処理するマルチメディア関連分野（波動信号処理工学系）、計算機援用が重要な役割をする電子・電気関連分野（応用電子工学系）を電子情報工学専攻として同一の博士課程に統合した。

最近、国際交流が非常に活発になり、研究面でも国際化が進んでいる。教員の国際的研究活動は画像処理、電磁界計算、計算機の知能化、光通信の面において特に活発に行われている。

本博士課程は、電子・電気工学専攻と情報処理工学専攻において科学技術の発展上重視すべき分野を視野に入れて、4学系をもって構成しその内容は次の通りである。（表3参照）

画像情報工学系

人間が外界から受け取る情報の大半は視覚からである。視覚情報を受け取り、それを利用するプロセスは、感覚、知覚、認知に分けられる。視覚情報が

大脳に伝わり光や色の感覚となり、次に客観的存在を認識する知覚へと発展する。さらに、感覚、知覚、記憶等に基づいて情報の概念や意味を形成し認知へと発展する。現象、物象を認知する因子として、画像情報は中心的役割の一つである。また、人工知能（ロボット）による制御や感性（視聴覚）情報の認知手段を得るにも、画像の処理、認識、生成、応用等が必要である。この分野においては、文字・図形・物体像等視覚に訴える情報を取り扱う。この学系では、符号化、画像強調、画像復元などを扱う画像処理、特徴抽出、パターン認識等を扱う画像解析、画像を数値計算で表現し、これを画像として表示する画像生成、さらに、画像計測、製品検査等応用の問題を研究する。併せて、現代の各種数学、電子計算機工学、サイバネティクス、認知処理技術等を研究する部門である。

計算電磁気工学系

電磁界を初めとする三次元場問題は古くから非常に重要な課題として、理論解析、実験、数値解析など種々の方法で、解明の努力がなされてきた。しかし、技術の発展とともに、要求される問題が次第に複雑難解となっているのが現状である。これに対して、計算機の高機能と三次元場問題特有の性質を整合することによって、解析可能な数値解析手法、それに基づく計算機シミュレーション手法の研究が進み、その応用も広がり、現在では情報、電子、電気の学際的領域の一つの重要な部門となっている。この学系では、上記の観点から、三次元場問題の数値解析の基本手法、それに基づくシミュレーション及びその工学的応用を対象とし、具体的には、三次元場問題の解析のための定式化、検証と計算最適化（精度、速度）、機器、装置システムの最適設計の基本手法、計算機シミュレーション及び各種応用ソフトウェア的手法について教育研究を行っている。

波動信号処理工学系

情報伝送網は情報化社会を支える極めて重要な基盤であり、社会の高度化とともに伝送すべき情報量は益々増加し、その上に種類も多様化してきた。これに対応するために搬送波として高い周波数の波動、すなわち、超高周波または光波が使用され、デジタル通信方式が主流になっている。これらの状況に鑑み、この学系では光波・超高周波の発生、変復調、伝送、検出など波動信号の処理方式・処理回路の教育研究を行う。このほか、雑音、伝送情報など不確定な波動信号の理論的取り扱いについての教育研究、さらに、非線形素子を含む回路に発生する特殊現象の教育研究も実施する。以上述べたように、この学系は、情報伝送を含め波動信号の処理に関する幅広い教育研究を目的とする学系である。

応用電子工学系

電子、電気、計測、情報処理などの各分野は互いに融合または結合することによって、新しい工学的応用分野を創出するが、いずれも計算機の援用を必要とする点では共通している。この学系では、電磁気学の基本法則に基づく電磁流体による発電とその機構の解析、プラズマや光ビームと固体表面の相互作用の解明による電子機能デバイスの製作プロセスの解析、放射線、放射能の精密計測による環境工学へのアプローチ等、ユニークな工学的応用について教育研究を行う。

以上の通り、4学系はそれぞれ特色を有する学系であると同時に、計算電磁気工学系は数値解析シミュレーションのプロセスや結果の表現において、波動信号処理工学系は高速、高品質画像情報伝送において共に画像情報工学系と緊密な関係をもっている。また、応用電子工学系を含むすべての学系にとって情報処理技術を駆使した計算機援用の手法も共通点の一つである。4学系が互いに結合することによって、更なる新しい工学的応用の展開が期待できる。

本専攻は入学定員2名の博士課程（修業年限3年）で、入学生は上記2専攻の修士課程修了者のみではなく、関連分野の修士課程修了及び同等の学力を有する国内外の研究者・技術者から選抜している。現在すでに1期生、2期生が在籍している。

研究面においては、すでに国の内外において当学科として実績ある研究成果を活かし、個々の研究を推進するとともに互いに協力して総合的な研究体制を組織している。具体的な研究を一、二挙げるとロボットビジョン、機器・装置・構造物の設計等の工学分野、交通システム、地理情報処理などの社会分野、医学、生物学、工学など多くの分野で共通して重要な課題となっている画像の処理・認識、コンピュータグラフィックス、画像・映像の高速伝送方式など画像・映像情報の処理・伝送に関する研究を行っている。また、有限要素法、表面電荷法、境界要素法など最近の数値解析手法と電子計算機を駆使した三次元電磁界及び類似場（電界、磁界、温度場等）の解析並びに数値シミュレーションによる電子・電気機器等の最適設計に関する研究などは、とくに国内はもとより、国際的に注目せられ、最近の内外の学術論文に多数掲載されている。これに関する国際会議も本年、当学大学会館で開催された。これらの研究を学系を越えて重点的に推進し、現在及び今後の社会の要請に応えたい。

4. 学科の運営と行事

情報処理工学科の運営はすべて学科会議（助手以

上出席)で行われる。学科会議で審議の後、実行に移される。会議は毎週水曜日、原則として午後の0時15分から同0時55分までの間(昼食時間を含む)に開かれる。会議の内容は、カリキュラム、学生の身分、学科の行事、進級、就職、卒業、その他教育上の重要問題について審議される。しかし、人事案件については教授だけの会議で審議された後、工学部教授会に上程される。当初は学科主任が会議の座長を務めたが、平成元年に学科長制度が実施されることになったので、主任に代わって学科長が座長を務めることになった。会議は議題のない場合にも昼食会を兼ねた情報交換の場として開かれる。

学科の行事としては、教養ゼミの見学会、ゼミ対抗スポーツ大会、3年次生の工場見学および4年次生の卒業研究の発表が主なものである。工場見学は学生として工場現場を直接見る唯一の機会であり、専門教育や就職希望者決定にとって貴重な体験で、効果は大きい。しかし、見学日程と見学先の決定、学生の旅費負担、欠席者の取り扱いについては毎年検討課題となっている。なお、見学の世話は3年次生の担任が当たることにしている。卒業研究の発表は他学科とほぼ同じ形式で行われている。可否の判定は論文と併せ、学則に従って行われる。

5. 学生の動向

情報処理工学科の学生の出身地は県単位でいえば、だいたい広島県、岡山県、兵庫県の順になっているが、兵庫県を含む近畿地区の出身者は相当数に上がっている。四国、東海地区の出身者も、中国、近畿ほどではないが、毎年一定数が必ず入学している。関東、北陸の出身者も皆無ではないことからみると、しだいに広域化していく傾向にあるといえよう。卒業生の就職先は当初、広島県、岡山県、近畿地区、東海地区がかなりの比率を占めていたが、近年、求人のもっと多い東京を中心とする関東地区が次第に増加している。今後の就職先は、備南地域は別として、さきに述べたように近畿、関東地区が多くなっていく傾向が強まるように思われる。就職先の業種は、必ずしも情報産業とは限らない。情報処理工学科が学際的性格を持つこともあって、電機、通信、機械、造船、建設など幅広い。しかし、従事している仕事の内容はいずれの業種でも情報処理、生産の自動化などコンピュータ関連のものとなっている。すでに、平成8年3月で7期生を送り出したことになるが、流動的な面もないとはいえないにしても、ある程度恒常的な就職基盤が構築されている。

6. 教育の課題と展望

中国、四国の私立大学で唯一の情報関係学科であ

ったが、最近いずれの理工系大学も競って情報関係学科を持つようになった。しかし、発足以来、間もなく10年になり、教育、研究、学生の就職も軌道に乗った。大学院(修士課程、博士課程)も設置されているので、大きな問題はないが、学生のレベルアップと人格形成については、全職員で真剣に取り組んでいる。レベルアップについては上限がないことを忘れず、教育の在り方について、学科では常に、教育方法の自己評価を怠らないようにしている。研究面については、本学科は若いスタッフが多いので、国際的レベルを維持し、さらに高い目標をもって前進していきたい。

平成2年4月に、本学の情報処理教育・研究環境の整備充実を図るため、共同利用施設として情報処理センターが設立された。このセンターの汎用コンピュータと情報処理工学科の汎用コンピュータとは回線で接続され、有機的な運用ができるようになった。さらに、平成3年には全国の大規模計算機センターと学術情報センターが構成する大学間ネットワークに加入し、他センターへのオンラインによるジョブの依頼や学術情報検索も可能となった。

近年、計算機環境は従来の大型計算機とパソコン端末の形態から分散型のネットワークの形態が主流になってきた。そこで、平成2年度からカリキュラムを検討し、従来の教育に加えて、ネットワークの基礎技術、計算機リテラシーとしてのネットワークの利用技術、世界的な標準オペレーティングシステムのUNIXの教育を導入した。平成4年度にはワークステーション64台を導入し学科内LANを構築し、センターの計算機とも接続した。さらに、平成6年には文字、音声、図形、画像情報などが扱われるマルチメディアの学内LANが構築され、情報処理教育・研究環境が一層整備された。平成8年度には広域ネットワークに加入し、世界中のコンピュータと自由に情報や知識の交換ができるようになり、高度情報化社会に応えられる教育・研究環境が整備された。

情報処理工学科は開設以来10年間、飛躍的に発展を遂げた。これは、ひとえに総長並びに理事長のご指導とご理解、全学のご支援、教職員の懸命な努力の賜である。過ぎてみれば短い期間であったが、一つの節目である。今日までの歩みを教訓としながら、今後の更なる発展を目指し、教職員が一丸となって努力致したいと決意を新たにす次第である。

表1 情報処理工学科専門科目年次別配当表

1 年 次		2 年 次		3 年 次		4 年 次	
授 業 科 目	単 位	授 業 科 目	単 位	授 業 科 目	単 位	授 業 科 目	単 位
○電気回路Ⅰ	2	数値解析Ⅰ	2	○情報理論	2	オペレーション	2
電気回路Ⅱ	2	数値解析Ⅱ	2	自動制御論	2	ズ・リサーチ	
電子物理	2	確率統計	2	電子計測	4	管理工学	2
電子材料	2	○システム	2	情報伝送方式	4	データ通信	2
○情報処理通論	2	基礎論		○機械電子	2	計算機	2
○プログラミング	2	電気回路Ⅲ	2	システムⅠ		ネットワーク	
演習Ⅰ		○電子回路	2	○計算機構成	2	機械電子	2
		パルス回路	2	計算機アーキ	2	システムⅡ	
		○情報伝送	2	テクチャ		情報システム	2
		基礎論		マイクロ	4	マイクロコン	2
		伝送回路	2	コンピュータ		ピュータ応用Ⅰ	
		○論理回路Ⅰ	2	○オペレーティン	2	マイクロコン	2
		論理回路Ⅱ	2	グシステム		ピュータ応用Ⅱ	
		○プログラミング	2	アルゴリズム論	2	データベース	2
		言語		応用プログラ	2	システム	
		○プログラミング	2	ミング		ソフトウェア	2
		演習Ⅱ		オートマトン論	2	工学	
		○データ構造	2	言語処理論	2	人工知能	2
		情報数学	2	○画像工学	2	コンピュータ	2
		○情報処理工学	4	パターン認識論	2	ビジョン	
		実験及演習Ⅰ		コンピュータ	2	○卒業研究	8
				グラフィックス			
				情報処理総合	2		
				演習			
				○情報処理工学	4		
				実験及演習Ⅱ			
				○情報処理工学	4		
				実験及演習Ⅲ			

[注] ○印を付したものは必修科目である。

表2 情報処理工学専攻修士課程

授 業 科 目
情報基礎工学系
情報基礎特論
情報処理基礎特論
計算機基礎特論
情報基礎工学特別演習
特 別 研 究
情報処理システム工学系
計算機システム特論
計算機ネットワーク特論Ⅰ
計算機ネットワーク特論Ⅱ
情報システム工学特別演習
特 別 研 究
計算工学系
計算工学基礎特論
計算工学応用特論
応用プログラミング特論
計算工学特別演習
特 別 研 究
画像情報工学系
画像情報工学特論
コンピュータ・グラフィックス特論
視覚情報認識特論
画像情報工学特別演習
特 別 研 究
関連科目
生体情報計測特論
通信伝送特論

表3 電子情報工学専攻博士課程

授 業 科 目
画像情報工学系
画像処理工学特論
図形認識工学特論
コンピュータグラフィックス特論
リモートセンシング特論
画像情報工学特別演習
特 別 研 究
計算電磁工学系
三次元場数値解析特論
三次元場シミュレーション基礎特論
三次元場シミュレーション応用特論
計算電磁工学特別演習
特 別 研 究
波動信号処理工学系
光情報伝送回路特論
超高周波回路特論
信号処理特論
波動信号処理工学特別演習
特 別 研 究
応用電子工学系
電磁流体応用特論
プラズマ電子応用特論
環境計測処理特論
応用電子工学特別演習
特 別 研 究

付表 情報処理工学科年表

年・月	学科の歴史、教員の異動
昭和 61・4	情報処理工学科開設 池上淳一教授（電子・電気工学科から配置換え、昭和63年4月工学部長、平成3年4月学長補佐兼任） 吉田恭信教授 小林富士男教授（平成2年4月情報処理センター長、6年4月学科長兼任） 河野俊彦助教授（平成2年4月教授） 清水光助教授（電子・電気工学科から配置換え、平成2年4月教授） 浜岡正明技術職員（平成5年3月退職） 中村恵子技術職員（昭和63年9月退職）
62・5	16号館（情報処理工学科棟）竣工
62・4	関章良教授（平成5年4月学科長兼任） 川久保和雄助教授（電子・電気工学科から配置換え） 新谷敏朗助教授 今井光祐助手
63・9	小田弘助手（昭和63年12月退職）
63・4	美咲隆吉教授（平成元年4月学科長兼任） 森克己教授（電子・電気工学科から配置換え、平成7年4月情報処理センター長兼任） 平川尚美技術職員（平成5年3月退職） 姫田尚子技術職員（平成元年3月退職）
平成 元・10	服部進助教授 渡辺栄治助手 田中始男助手（平成5年10月講師） 定金直美技術職員（平成5年7月退職）
10	坪井始助教授（平成3年4月教授、6年4月情報処理センター次長兼任）
4・4	笠井保教授（大学院計算機ネットワーク特論Ⅰ担当、平成6年4月福山平成大学へ配置換え） 西田友是教授（電子・電気工学科から配置換え、コンピュータ・グラフィックス特論担当、平成5年3月電子・電気工学科へ配置換え） 大学院工学研究科情報処理工学専攻（修士課程）開設
5・4	片桐重和技術助手
11	橋野淳子技術助手
6・4	日暮美紀技術助手